

## A. 6月5日 後山さんインタビューでの失敗とその分析

1班

黒田・漆原

### 1. 失敗の分析

2002年6月5日、伊勢町社会福祉協議会職員である後山さん（仮名）を徳島大学にお招きし、大学開放実践センター会議室にて、15時からボランティア活動の是非についてインタビューを行った。ビデオカメラを4台（Hi8、DVそれぞれ2台ずつ）設置し（Hi8のうち1台は作動せず）、テープレコーダーによる録音を行った。インタビューアーは檜田<sup>1</sup>で、他の参加者は9名の学生（1名欠席）である（図1参照）。

このインタビューにおいて、2点の失敗があげられる。1つ目は、Hi8 1台が作動しなかったこと、2つ目は、後山さんとのインタビューにおいて、ボランティアの事実や実情をうまく聞き出せなかったことである。それでは、これらの失敗の直接的な原因について、考察していく。

まず、1つ目のカメラ4台中1台（Hi8）が作動しなかったことについてであるが、後ほど調べた結果、その原因は、テープの誤消去防止タブが防止側に移動していたことだった。そして、インタビュー時にはそれに気づかなかった。その背景的原因として次の3点が考えられる。新品のテープを使用していなかったこと、その日の昼にリハーサルができていなかったこと、その場でビデオカメラの液晶画面のトラブル表示マークから問題を把握する事ができなかったこと、である。

これらの原因をそれぞれ分析してみる。

新品のテープを使用していなかったことについては、ソニーのビデオカメラ取扱説明書<sup>2</sup>に、大切な撮影の際は新品のテープを使用するならば、まず試し撮りをするように注記されている。そのため、新品のテープを使用しなかったことは、間違っていない。

その日の昼にリハーサルができていなかったことについて、その日は学生それぞれが授業の合間をぬってインタビュー撮影の準備をしていたので、リハーサルの時間が十分取れなかった。それに加え、この日の技術的課題は、別のところにあると思われていた。すなわち、それは(a)据え置きデッキでの録画及びビデオの音声をMD音声に置き換えたクワッドプロセッサ<sup>3</sup>の利用である。それに比べれば、Hi8 カメ

<sup>1</sup> この調査実習の指導者。徳島大学総合科学部人間社会学科助教授。

<sup>2</sup> 『TRV101』（p.12）に「テープの最初から撮影するときは15秒ほど撮影してから本番の撮影をすることをおすすめします。テープの一番初めから撮影すると、他の再生機では初めの部分が欠けることがあります。」と書かれている。

<sup>3</sup> クワッドプロセッサとは、4画面分の入力情報を合成し1つの画面にして出力する装置である。音声はここを経由しない。コンビニエンスストア等の防犯カメラによく用いられている。

ラ単独での撮影はすでに何週間も前から繰り返し練習済みのことであり、問題がおきるとは想定されていなかった。当初計画では、(a)の新課題の達成が困難な時は、その部分を取りやめ普通の単体、Hi8 二台での撮影のみを実施するつもりだったが、実際には単体での撮影すら1台しかうまくいかなかった。

その場で液晶画面のマークから問題を把握する事ができなかったことについて、マニュアルをその場で参照して解決できなかったこととマニュアルが頭に入っている「専門家」を養成できていなかったことである。この2つの問題点は分割して考えることも可能だが、ここでは関連しているものとして考えていく。なぜなら、マニュアルは初めてその機材等を利用するときには大変参考になり有効であるが、いざトラブルが起こったときにマニュアルを参照しても適切な解決策が記述されていない場合があるからである。仮にトラブル解決の記述があったとしても、マニュアルを精読していない限り今起きている事態がマニュアルに解決策の書かれている事態と同一の事態であると速やかに同定することは困難である。また、Hi8での撮影はそれまでに何回も繰り返し行っていたため、撮影のトラブルが起こるとは予想しがたかった。このようなトラブルに対処するためには、やはりマニュアルを精読することは必須であり、その機材の操作に習熟している必要がある。しかし、この実習には10人の学生が参加しており、一人一人がマニュアルを精読し、機材の操作に習熟するよりは、役割を分担する方が効率的である。そのためには、実習の全体を統括しているリーダーが必要であるが、今回の場合では、学生それぞれが「指示待ち体質」になっており、自ら進んでマニュアルを精読し頭に入れようとはしていなかった。以上のように考察すると、ここが今後の課題だろう。つまり、当面すべきことがぎりぎりできるだけでは突発事態には対処できないということである。この問題が6月の段階で解消できないのは仕方がないが、伊勢町に調査に行った9月25日の失敗<sup>4</sup>でも解消できていなかったのは、痛かった。

次に、2つ目の後山さんとのインタビューにおいてボランティアの事実や実情をうまく聞き出せなかったことについてである。榎田は事前に後山さんとボランティアの実情について話をしていた。後山さんは伊勢町での会議でボランティアの問題点について語っていた。そこでの後山さんの見解は、実験的または軽率なボランティアは、他人に迷惑を掛けたくないと自立して生活を送っている高齢者の依存心を無責任に煽り高めてしまうという危険性があるということだった。後山さんの見解を榎田はインタビュー前に知っていたため、このインタビューでは、「後山さんの見解(ボランティアには依存心を高める危険性がある)」を榎田が押し付けたかたちになってしまい、せっかく後山さんが来てくださっている

---

<sup>4</sup> 伊勢町社会福祉協議会の撮影時に、当初マイクロフォンミキサーを使用して2台の電話の音声を録音しようと予定していた。しかし、失敗し、結局1台の電話にMDを直結させ、録音する事となった。

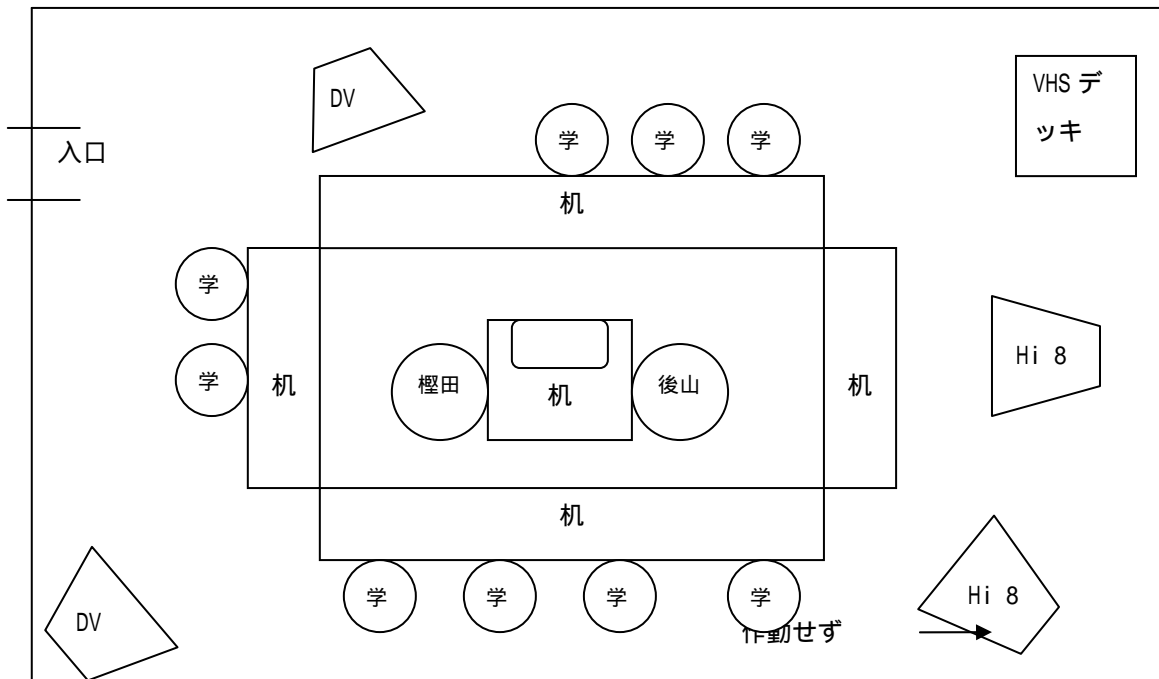
のに、そのインタビューの中で初めていろいろなことが明らかになっていくというライブ感を作り出せなかった」（榎田の反省）という結果となってしまった。

本当に介護が必要な高齢者は介護のプロに頼むか、施設に入所している。よって、それらの人はボランティアに依頼する必要がない。しかし、高齢ではあるが、自立して日常生活を送っている人は、人に迷惑をかけないように生活したいと望んでいる。そのような高齢者をボランティアが度々訪ねることで、依存心を高めることになってしまい、実験的なボランティアをすることの罪深さやボランティアの微妙さが浮き彫りになってしまう。だからと言って、特に一人暮らしをしている高齢者を放っておいてよいのかというと、そうではない。このインタビューではボランティアには依存心を高める危険性があるという見解をもっと論じるべきだったが、表面的な解釈に終了したため、そのジレンマが明らかになっていくライブ感が作り出せなかった。インタビューの中で、後山さんは、ボランティアを特別視し、高齢者に対する押し付けや負担とするのではなく、日常生活において近所の住民たちが自然にコミュニケーションとして高齢者と接することができるようなまちにしたいと語ってくれた。もし、ボランティアには依存心を高める危険性があるという見解をもっと論じることができたならば、後山さんの願いである高齢者に優しいまちづくりがもっとリアルに描かれていただろうし、インタビューアーである榎田をはじめ、学生たちが知らないボランティアの真実や現状をもっと聞きだすことができたのではないだろうか。

では、この失敗の背景的原因として、後山さんをインタビューアーや学生9名で取り囲んでしまい、公式の見解を要求するような環境を作ってしまったこと、機器のトラブルをインタビューアーが引きずったままインタビューを開始してしまったため、落ち着いて話を引き出すことができなかったこと、という2点があげられる。この2点について、インタビューを始める前に予定以上に機械の設置に手間取り、その間後山さんを待たすこととなってしまい、榎田・学生両者に焦りが生まれた。その焦りをインタビュー中も引きずることとなった。

## 2.まとめ

以上から、後山さんに本音を話してほしいという期待を抱いていたが、多くの学生と多数の機材で囲むことにより、その期待に反して緊張環境を作り出してしまった。このため、後山さんに本音を話せる環境ではなく、公式の事しか話してもらえない環境となってしまった。そして、ボランティアの危険性や真実、現状についてあまり論じないまま、インタビューは終了した。しかし、ここでは、見解を押し付けたことが真の問題だったのではない。その見解にたどり着くまでにインタビューアー（榎田）とインタビューイー（後山さん）が論じるべきことがもっとたくさんあったはずだ。それが実現することなく公式の見解を述べてもらうにすぎないインタビューに終わってしまったのは心残りである。



【図1：後山さんインタビューの様子】

学…学生を表す

## B．撮影機器の準備と配線の苦勞

2班

小野

### 1．さまざまの苦勞

#### 1 - 1．機器を相手にした苦勞

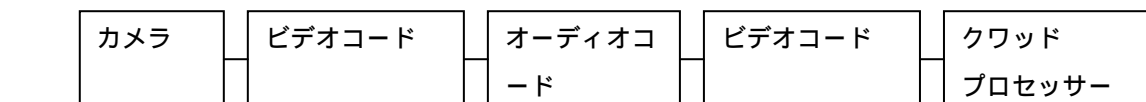
今回の合宿では撮影や録音といった作業は常であった。論文を読みそれについての意見を皆で交えるという授業形式を普段取っている私たちにとって、その撮影や録音に使用した機器の中には初めて見るものも少なくはなく、扱うこと、また準備することにもたいへんな苦勞を要した。とりわけ、合宿2日目に社会福祉協議会で行った一日がかりの撮影では、使用した機器の種類も多様で撮影範囲も広域であったため、その苦勞は2泊3日の合宿の中で最も大きかったと言えよう。そこで、私たちが社会福祉協議会で体験した機器を相手にした苦勞の一部を紹介したいと思う。

#### 1 - 2．コードの接続・延長

この合宿で使用するための機器類の買い物は合宿前日というギリギリまで行った。また、調査場所である社会福祉協議会の正確な広さについて前もって調べていなかった。その結果、当然のことながら撮影の準備をしているときにいくつかの問題とぶつかった。

まず、ビデオカメラとクワッドプロセッサ<sup>5</sup>を繋ぐために3色(赤・白・黄)のプラグがついたビデオコードを使おうとしたところ、準備したものでは長さが足りなかった。しかし、私たちはこの問題を解決することができた。その解決方法はビデオコードはビデオカメラの出力、クワッドプロセッサの入力にのみ接続し、その間の足りない長さはオーディオコード(赤・白)で代用した<sup>6</sup>。この接続では画像を伝えることができないように思えたが、クワッドプロセッサにより4分割されたテレビの画面の一つに、その問題のカメラが捉えた画像を映し出すことができた。

また、凸プラグと凸プラグを接続させるために中継アダプター(両側が凹の接続用部品)を使用した。コードとアダプターの機種が違うために接続が緩くなってしまった。そのため抜けやすく、映像が途切れやすくなってしまっていた。しかし、このことには準備段階で気づくことができ、セロテープを使い固定することで簡単に対処することができた。



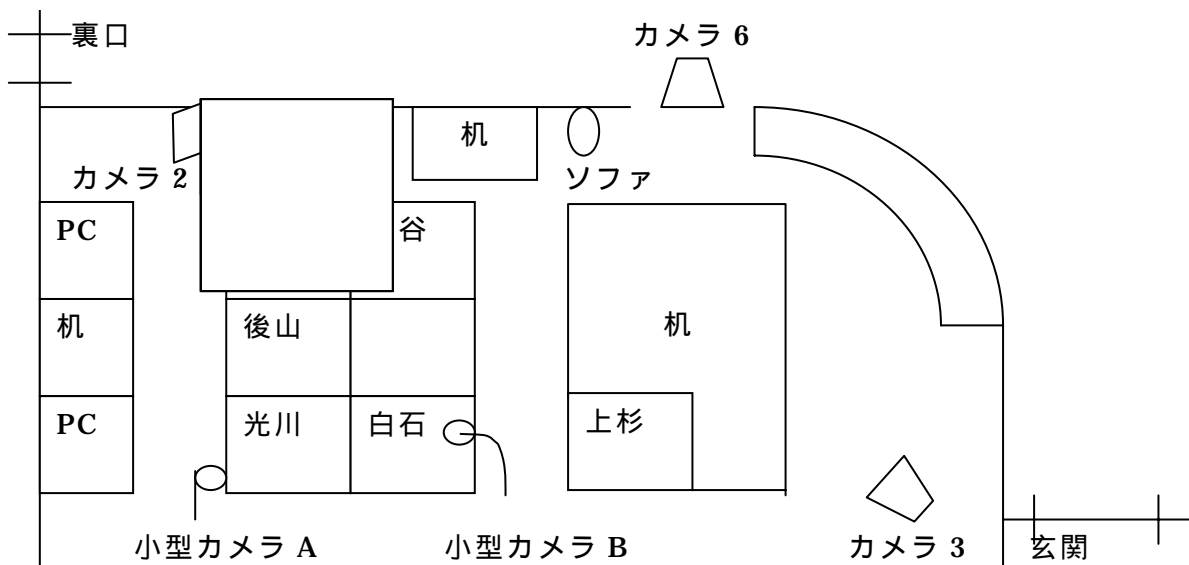
<sup>5</sup> クワッドプロセッサとは、4画面分の入力情報を合成し1つの画面にして出力する装置である。音声はここを経由しない。コンビニエンスストア等の防犯カメラによく用いられている。

<sup>6</sup> クワッドプロセッサは音声を経由しないため、クワッドプロセッサへの配線は映像ケーブル(黄)のみでよい。ゆえに、オーディオコードのプラグ(赤・白)のどちらか一方を映像プラグとして代用することで、映像をクワッドプロセッサまでととけることができた。もう一方のプラグはどことも接続せず余らせた。

### 【図1：オーディオコードの利用方法】

#### 1 - 3 . 集音マイクを使つての録音

第 部の第一章、第二章で取り上げた場面は、いずれも合宿 2 日目に社会福祉協議会での撮影で得られたデータである。この両シーンはカメラ 2<sup>7</sup>のそばでの出来事であった。そのため、撮影時にそのカメラ 2 で対象を捉えようとカメラを左方向へ旋回させたのだが、接続コードが短く接続部が離れてしまった。よつてその二つの場面のデータ分析はいずれもカメラ 3 から得られた映像と音声で行われた。図 2 を見てもらえば分かるように、カメラ 3 と分析の対象となつた人たちの距離は離れている。ゆえに、この 2 つの場面の分析は有効な情報を見つけにくく特に難しいものであつた。とりわけ、音声のトランスクリプト化には困難を極めた。カメラ 3 には特別に外付け高指向性集音マイク（いわゆるガンマイク）を付けていたため対象となる音声を拾うことは十分に可能であつた。しかし、マイクは他の多くの音声も拾つてしまつていたので、その結果、他の音と混ざつてしまい、分析対象の音声を正確に聞き取ることが難しくなつていたので、この場合はマイクを付けていなければ対象の音声を聞き取ることができなかつた恐れもあるので一概に失敗だつたとは言えないが、使用した機器が高性能ゆえに新たな困難が生じることもあるという例である。

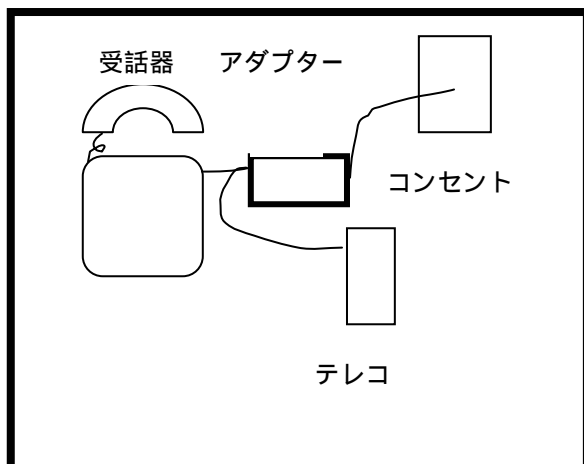


【図 2：社会福祉協議会の見取り図】

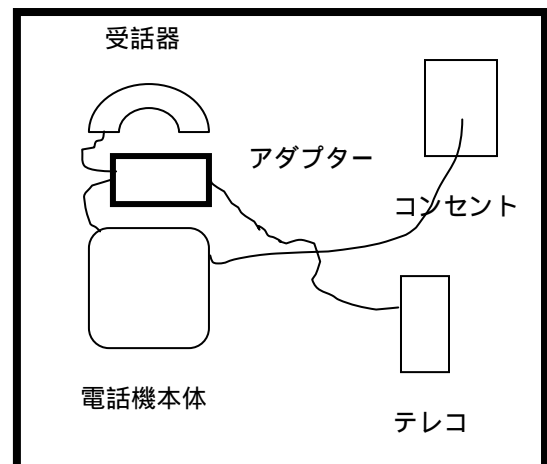
<sup>7</sup> 研究室所蔵のビデオカメラは、HI8 カメラが 3 台（カメラ 1 ~ 3）、DV カメラが 3 台（カメラ 4 ~ 6）の計 6 台である。各カメラには番号シールが貼つてあり、図 2 のカメラ名はこの番号に基づいて定められている。

#### 1 - 4 . ラインコード用・ハンドセット用

私たちは社会福祉協議会での撮影で、電話での会話の録音も試みた。そのためにテレホンレコーディングアダプターという特殊な機器を使用した。このテレホンレコーディングアダプターにはラインコード用とハンドセット用の2種類があった。ラインコード用の方はモジュラーコンセントと電話機本体の間にこの機器を接続し使用するものだ。ハンドセット用の方は電話機本体と受話器の間に接続し使用するものである。この2つともが合宿前に学生の自宅で行われたテストでは問題なく使用できた。しかしながら、本番当日、社会福祉協議会でこの2つをそれぞれ接続したところ、ハンドセット用は問題なく使用できたのに対して、ラインコード用の方はうまく機能しなかったのである。テープレコーダーの方へ音声がかちんと流れてこなかったのである。原因ははっきりと分かっているわけではないが、ラインコード用とハンドセット用の接続場所の違いから、社会福祉協議会の内線の仕組み<sup>8</sup>と関係があるのではないかと思われる。対処の方法も見つけられなかったため、ラインコード用を接続した電話機の会話の録音は断念した。さらに悪いことに、うまく機能していたハンドセット用の方の電話機はほとんど利用されなかったのである<sup>9</sup>。



【図3：ラインコード用の接続】



【図4：ハンドセット用の接続】

#### 1 - 5 . 苦労から得た教訓

今述べてきたこと以外にも2泊3日の合宿を通してみれば、他にも機器を相手に苦労したことは多々あった。その中で、ラインコード用のテレホンレコーディングアダプターの

<sup>8</sup> 社会福祉協議会内の各電話は内線通話や転送が自由にできるビジネスホン機能を持っていた。

<sup>9</sup> もちろん、よく使う電話機としてスタッフに推選された2台をハンドセット用テレホンレコーディングアダプター設置機に選んだのだが、実際にはあまり使われなかった(おそらく使用が避けられていた)。

ように、問題に直面した時に対処することができず断念してしまったこともいくつかあった。しかし、オーディオコードをビデオコードの代用として用いることで目標を達成できたように、問題に直面した時に、その問題を見極め、その場でどうにか対処し何とかなったこともあった。問題にぶつかっても、焦らずその場で思考を凝らせば解決できることもあるということを身をもって学んだ。そして、私たちの力で撮影し得られたデータから良い分析対象を見つけ出すことができたので、私たちは持ち帰ったデータに満足しているし、自信もある。欲を言うならば、今回使用した機器を事前に何度も使っておき、その性能についてもっと詳しく調べれば・・・というのはあるが、それは次回に活かすべき反省として受け止めたいと思う。



## 調査合宿における失敗と苦勞（１） その分析と対策の検討

2班  
師橋

### 0. プロローグ 調査前史

調査合宿を一つの大きな目標として、その前に様々な基本的な知識や、インタビューなどの練習といったもの身につける事が求められた。そのために以下のような日程となったのである。これらは、実践的なものを主に挙げただけで、勿論このほかにも様々な会話分析、エスノメソドロジーの基本的な文献を読み進めていった。

- 5月11日 通い合宿（1日を通して文献を読んで発表、議論を行う）
- 5月22日 阿部智恵子氏を招いて榎田教官<sup>10</sup> 阿部で模擬インタビュー  
（テーマ：これまででもっとも困難だったアルバイト）
- 5月29日 インタビューの練習（班単位でテーマを決めて行う）
- 6月 5日 前半：太田能氏を招いての講演  
（伊勢町福祉情報システム<sup>11</sup>についての概要を中心としたもの）  
後半：インタビュー実施<sup>12</sup>  
（伊勢町の社会福祉協議会に勤める後山さんを大学内の開放実践センターに招いて）
- 7月24日 伊勢町へ事前調査（朝8時半に集合その後現地へ）
- 8月8日 教官+1班 伊勢町へ再度調査に向かう
- 9月中旬 調査合宿に向けて班単位で教官との個別ミーティング
- 9月20日 全体ミーティング  
（事前に行われたものとしては最後）

【図1：合宿までの主な日程】<sup>13</sup>

このような基本的な知識を身につけた上で調査に臨もうとしていた。しかし、今思えば、

<sup>10</sup> 彼は今回の調査実習の指導者。徳島大学総合科学部人間社会学科助教授である。

<sup>11</sup> このシステムの正式名：A県伊勢町福祉支援情報システムの開発・展開事業、期間：平成12年2月～15年3月。ボランティアが会員登録することにより要介護者・要援助者からの依頼を適切なボランティアに順番に音声合成により電話し、承諾の可否を問い合わせるといったボランティアコーディネート（需要と供給のマッチングなど）を役場を媒介として行われるもの。それ以外にも様々な機能を果たしている。だが、実際には難点もある。

<sup>12</sup> このインタビューについての分析や反省については詳細を述べた「6月5日後山さんインタビューでの失敗とその分析」を参照にしていきたい。

<sup>13</sup> 詳細については末尾の参考資料を見ていただきたい。

機材操作についての基本的な講習会などの時間が十分に取る事が出来なかった事、またそれを自発的にやろうとしなかった事にも問題はあったのかもれない。実際、論文の編集を始める頃にパソコンの画像処理作業などの操作を覚え始めたといっても過言ではない。

## 1. 調査合宿 (2002.09.23 ~ 25)

以下では、調査合宿に関して(その直前に行われた準備作業なども含めて)扱っていく事にする。

### 1.1. 機材 「つけられない」・「動かせない」という問題

機材に関しては、「(器具が)足りない」、器具がそろっても「つけられない」、そして「動かせない」という問題が存在していた。

当初に考えていた24日の丸一日をかけて行う取材について、その際にテレフォンピックアップ(電話の音声を録音する事)を2種類用意して電話音声を録音しようというもの、又その配線についてどう言ったつなぎ方にするのかについては二転三転した。配線のコードが当日まで揃わなかったこともその一つである。本来ならば、ある程度の長さのあるコードが適しているが、なかなか見つからずに、直前まで短いものを複数繋げて配線を計画していた。(詳しくは配線の苦勞を参照に)

音響に関しては特に、回線が理解不足のために、上手く機能しなかったことが最も大きかったように思われる。(ステレオとモノラルというそれぞれの端子の違いの理解不足など)現場で使われている電話の機材、種類<sup>14</sup>といったものを事前にきちんと把握するべきであったのかもしれない。だが、そのハプニングについてどういった対応ができるのかもある種の醍醐味として考えるならばどうなるだろうか。

緊急事態においては、事前に蓄えておいた知識は通用しない。その場での的確な判断力、またあるチームとしての結束力といったものが一番に求められる。トラブルという点ではある種の共通した状況が調査の中でも繰り返り起こっていた。

「事前の講習会みたいなものももっと早くからやっておくべきではないのか」、「機材が前日になって初めて揃うのはありえないことじゃないのか?!」といった声も実際の場では出ていた。ちなみに事前講習会は及びミーティングは20日(個別の班単位では他にも行われていた)に行われていた。

### 1-2. 時間 「間に合わない」・「遅れる」・「終わらない」

時間については、サブタイトルのもなっているが、「間に合わない」、「遅れる」、

---

<sup>14</sup> 社協で使用されていた電話の種類がビジネスフォンであったため、局線割込型(電話本体と局線をつなぐ形式)のテレフォンピックアップ2台は結局つながらずに、ハンドセット型(電話本体とハンドセットをつなぐ形式)の2台のみしかセットできなかつた。しかも、このようにテレフォンピックアップのセット台数が減少した結果として、録音をされている電話の使用が避けられるという事が生じてしまったようである。4台という当初の予定が2台になったという影響は、総通話に対する録音電話比率で言えば、半分以下になるという大きなものであった。

「終わらない」という問題があった。依頼状の発送遅れから始まり、様々な「遅れ」については調査にご協力をいただいた方々には多大なご迷惑をおかけしてしまった。そして、ここで話題となっている依頼状に関しては、「もう少し早く送ってもらえるものかと考えていた」という先方からのクレームもあったほどであった。この場合、実際に送った日付はメールと速達便という形で9月20日に送ったという記録がある。しかし、先方にしては、少しでも早く連絡を頂いてなるべくできることならば協力したいという温かい配慮があったが故の発言だろう。実際に、25日の電話回線を用いた役場 中井さん宅の取材に関しては、事前に何度も役場の方と中井さんとの打ち合わせがなされていたと聞いた。そういった根拠から先のような発言が飛び出したということは容易に推測出来るだろう。

勿論、私たちの対応の出来の悪さはもっともなことであるが、ここで敢えて付け加えさせてもらうなら、調査の上で求めていたのは緻密に構成された上でのデータの収集ではなく（仮に工学的な領域であるとすれば）、日常の断片を切りとったような形で見えてくるごく普通の自然体としてのデータ（社会科学における領域として）だった。以前からこの町で行われていた福祉情報システムの研究（工学的な領域を中心に行われている事業）の一端として今回の調査合宿があるのだから、そのようにある種の誤解（役場からの依頼として緊張感なり、それなりの振る舞いを要求されるのではと考えるようなこと）を招いても仕方はないとは考えられる。そのような誤解を招くかもしれないという私達の側の考慮の不足が今回のような事を引き起こしてしまった事には深く反省したい。

### 1-3. ほう・れん・そう

調査の基本として今回に限らず、用いられているのがこの「ほう・れん・そう（報告・連絡・相談）」という言葉だろう。これは、自分である程度事態を考えた上で、報告し、連絡する。そして報告された者は報告した者と共に事態をどのようにして改善していけばいいのか考え、対策を練る、といったことである。

今回の調査時に、果たしていかなるときも冷静に報告・連絡・相談といったことができているのかといえば疑問であった。上記のような機材の配線ミスがあったとしてもそれぞれが理解の領域があるために誰に聞けば確実な判断を下すことが出来るのかというのは曖昧であったように思われるし、誰がその場の責任者であるのかも随時変わったりしていたような気がする。そういったコミュニケーション不足、連絡不足は後になって出てくるものである。随所にその影響が出てきていたように思う。

だが少し視点を変えてみれば、事態を把握する臨機応変さ、対処の迅速さが個人個人にとって必要とされるのもこういった場面ではないだろうか。特定個人に負担をかけすぎではないかという声は合宿中にも出ていた。しかし、一人一人が現場の責任者というくらいの意識があったからこそ、今回のように多数のトラブルに巻き込まれながらも貴重なデータを収集できたのも各人の判断力などの賜物ではないだろうか。

#### 1-4. まとめ

以上のように調査について述べてきたが、起こった事に様々な反省をしたとしても所詮過去のことでしかない。今においてはどうしようもない事実でしかないのである。だとすれば、今後はどうすればいいのか？

まず、考えられる事としては、緊急事態に対しても対応できるようなある程度の知識ではないだろうか？知識がなければ、対応できたはずの事態に対応できなくなる。機材のマニュアルの熟読やまた現地の様子を事前調査などである程度把握する事がそれに該当するであろう。また、経験を通してでしか得られない事も多い。インタビューを実際に行うときもどういった質問が、より相手のことを引き出す事が出来るのか、またインタビューする側、される側になってみてしか分からない事もあるだろう。そういったことをもっと練習、そして体得しておくべきではなかったのか？今回の私達の失敗はもうどうしようも出来ない事実ではあるが、今度また誰かが同じ事を行うときに何らかの参考となってくれるものとして改善策、問題点といったものを掲げてみた。

(合宿に際して)

<日程>

9月23日

午前8時半 集合

午前9時 出発

12時 現場到着(予定)

- ・ 宿泊予定場所で昼食をとり、ミーティングを行う(機材の確認はおこなう予定であったが、時間が予定より遅れていた事もあり、ここでは行わなかった)
- ・ 荷物を置いた後、各班での分担作業

午後2時ごろ～

- ・ 1・3班 水野さんへのインタビュー
- ・ 教官・2班 中井さんへのインタビュー
- ・ インタビュー終了後伊勢町の社協に集合  
(翌日の挨拶、機材の持込(出来る範囲でこの段階で準備も行った)など)
- ・ その後、宿泊場所へ

20時ごろから

- ・ 夕食をとった後、ミーティング  
(当日に行われたインタビューなどを見て議論を深める)
- ・ 翌日の一日取材のための打ち合わせ、役割分担

自由時間の後、就寝

9月24日

朝 6 時起床

- ・準備をした後、本日の取材場所である社協に向かう  
( 8 時半には取材が開始できるように 8 時前に出発 )

午前 8 時半前から社協にて取材開始

- ・ 1 班はこの取材中に社協の方々へのインタビュー午前と午後を実施していた  
( 3 名前後 )
- ・他の班はそれぞれ休憩も入れながら交代で取材を続ける
- ・取材は午後 6 時近くまで及んだ

午後 7 時ごろ

- ・宿泊場所に到着 ( 途中、今日のレジユメの制作 )
- ・軽く夕食をとった後再びミーティング及び今日の反省
- ・ミーティングの後社協の方を交えての懇親会も行う

9 月 25 日

朝 7 時起床

- ・準備を行った後、軽くミーティングをして今度は役場に向かう

午前 9 時半ごろ

- ・役場でテレフォンピックアップのビデオ撮影準備
- ・ある程度準備が整った後、教官と 2 班 中井さん宅へ移動

午前 11 時ごろ

- ・ ( 予定より大幅に遅れて ) 役場と中井さん宅を繋いでの取材の開始

午後 1 時ごろ

- ・取材終了、機材の撤収

午後 3 時ごろ

- ・役場など、今回協力を頂いた皆様への挨拶をした後に、大学へ戻る

午後 7 時ごろ

- ・荷物などもすべて片付けた上で解散

## 2. 報告書で

### 2 - 1 . データの検討 解釈変更の繰り返し

夏休みに調査合宿に行きデータを集めて、10 月からまた論文を読みながら、平行してビデオや音声の分析を開始していったわけだが、苦労した事は山のようにあった。

たとえば、今までいいのではないかと考えられてきた解釈がデータを見直せば一度で変わってしまったなんて事をはじめとして、データに新たな発見を見出して解釈を加え、他

の人々に駄目出しをしてもらったりしながら全く別の原稿が次のゼミの発表においては出来ていたり・・・。そのいただいた貴重な発言をもとにしてまたデータを見直していったり、班員と集まって解釈を煮詰めっていったりしていた。

ただ、個人的な話にはなるが、一度積み上げたものを壊してまた新たなものを作り出すのは私自身あまりない経験であった。解釈を加えていく中で自分自身が見えなくなることもしばしばであった。その中でも文献を読み進めながら何か使えるものはない必死になっていた。まだ会話分析という比較的新しい領域であるが故に参考となるものは多いとはいえないものであった事も一因となったのかもしれない。しかし、考え方によれば、参考となるものが比較的少なかったということはそれだけのやりやすさがあったとは言えないだろうか。

## 2-2. トランスクリプトの作成 根気と限界

トランスクリプトの作成、また画像データの作成は一見、地味な作業ではあるが実際は相当の根気を要するものだった。一言、一字たりとも逃してしまうとデータとしては成り立たない。ずっとペンと紙を片手にビデオやカセットテープの音声を聞きながら拾っていくという作業はこの論文集の制作を通して一番困難だったと思う。そうやって拾い集めて出来たデータを今度はパソコンに打ち込んでいく。トランスクリプト特有の様式(この論文集の冒頭にもあるが)には慣れるまでが大変であったし、(前期で徹底的にその基礎となるものは学んでいたが実際に作業を始めると、その苦労は身をもって実感した)、また、(データを)聞いたときに新たに発見されたものを再入力する作業を何度となく繰り返していた。そのようにして、修正に次ぐ修正が何度も行われてこのように形となったのである。このように、たくさんの苦労を味わった分、出来上がった時の嬉しさも普通じゃなく大きなものとして感じられたと思う。比較的大きなデータについてのトラブルが少なく済んでいるのも、各人の周到なまでのバックアップや、相互間での呼びかけなどがあったからであろう。

切羽詰るほど冷静でいられなくなる自分といつまでも冷静沈着なデータとの我慢比べみたいな部分も多少はあった。自分の計画通りには進まず予定がどんどん遅れていく事もしばしばであった。その度に嫌になったり、そう思えば、ふと気が向いてまたデータを見直したり...そんな事を繰り返しながらデータに解釈を加えていった。苦労は大きかったがその中で得られたものもいくつかはあったと今は思いたい。(まだこの原稿を書いている時点では勿論、すべて書きあがってはいないが...。)

【参考資料1：調査合宿】

<調査実習タイムテーブル>

9月23日(月)

時間	動き	場所
8:30	集合・準備	社会調査室
9:00	出発(運転者...檉田・黒田・西寄)	
11:00	ホテル到着(荷物は部屋に持ち込まない) ミーティング・機材確認	宴会場「あじさい」
12:30	昼食	レストラン「シリウス」
13:30	出発	2班・先生・・・ボランティア宅 1・3班・・・被ボランティア宅
14:00	インタビュー・撮影開始	
16:30	報告・ビデオ分析・見直し	和室(男子部屋)
19:30	食事・集金	道の駅ありくい宴会場
20:30	自由・入浴	

9月24日(火)

時間	動き	場所
6:00	起床	
7:00	朝食	
7:45	出発	社会福祉協議会(全員)
8:00	到着(～8:20 ビデオ撮影開始)	
18:20	撤収	
19:00	食事	道の駅ありくい宴会場
20:30	ミーティング・報告	和室(男子部屋)
22:00	花火	ホテル前の海岸

9月25日(水)

時間	動き	場所
7:00	起床	
8:00	朝食・荷造り	
9:00	出発	町役場(全員)

9:30	到着 ----- 出発(2班・榎田)	ボランティア宅
10:00	撮影開始(1・3班)	町役場
10:30	やらせ開始	
12:30	集合 ----- 出発(3班・榎田)	町役場 被ボランティア宅
15:30	撤収・集合 ミーティング・荷造り	町役場
16:00	出発	
16:30	滝見学	
17:00	出発	
19:30	学校到着・解散	

【参考資料2：社会調査実習日程】

5月11日・・・ 通い合宿(1日を通して文献を読んで発表、議論を行う)

5月22日・・・ 阿部智恵子氏を招いて榎田教官<sup>15</sup> 阿部で模擬インタビュー  
(テーマ:これまででもっとも困難だったアルバイト)

5月29日・・・ インタビューの練習(班単位でテーマを決めて行う)

6月5日・・・ 太田能先生の講演(伊勢町福祉情報システム)  
後山洋子氏インタビュー(伊勢町ボランティアコーディネーター)

7月24日・・・伊勢町調査実習下見

- ・ 社会福祉協議会訪問、見学、ビデオ設置相談
- ・ 伊勢町役場内の関連施設見学、水野さんの日常業務撮影
- ・ ボランティア宅・被ボランティア宅訪問、アポ取り
- ・ 宿泊所見学

8月 日・・・水野さんの日常業務撮影(視線追跡装置付き)

9月23~25日...伊勢町調査実習

23日...ボランティア宅(2班)・被ボランティア宅(3班)インタビュー、報告会

24日...社会福祉協議会ビデオ撮影、インタビュー(1班)、報告会

25日...伊勢町役場(1・3班)・ボランティア宅(2班)ビデオ撮影、被ボランティア

---

<sup>15</sup> 彼は今回の調査実習の指導者。徳島大学総合科学部人間社会学科助教授である。



宅インタビュー（3班）

11月20日...第一回調査中間発表会（ゲスト：藤守義光先生）

1月15日...報告書の作成、本格化

2月14日...実習報告会（模擬）

2月21日...実習報告会（本番）